
オーガズムは進化する

メイシア マルキュリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーガズムは進化する

【Zコード】

Z7016G

【作者名】

マイシア マルキュリア

【あらすじ】

女性の性感はどこまでも深くなつてゆくのです限りなく高まってゆく真のオーガズムの世界へ

その1 オーガズムは進化する

女性は何度もオーガズムを感じることができます、その感じる度合に天井はありません

どこまでも感じる度合いは強く深くなつてゆくのです。

もちろんオーガズムの感覚にも個人差はあります、ですが体を運ぶ練習をしてゆけばオーガズムの感覚は無限に高めてゆけるのです。

女性は感じる肉体を「えられ男性は女性への欲求を天から「えられています

これを自己の満足の為に使うか相手の満足のために使うかこれによつてすべての結果が決まるものなのです

本来SEXは魂と肉体を重ね通い合わせる尊い陰陽合一といつ宇宙の理に従うもので、大宇宙と一つになる尊い業なのです
ですからSEXと言わずにひとつになると言つのがたらしいのです
よう

一般的に男性のオーガズムは射精の瞬間にあるとされております
確かにそうかもせんがこうも言えるでしょう

男性は抱いている女性が性の喜びを感じるその肢体を見てその乱れ

洩れる声を聞いて満足を感じる

それが男性のオーガズムなのではないでしょうか

ですから感じやすい女性を抱いた時の男性の喜びはひとしおのものなのです。

そして女性のオーガズムを高める為にもっとも大切なことは男性に抱かれているときにオーガズムに達するように自ら身と心を導くこ

となのです

一度いつてからここへ一度いつてからここへです
そうすると一度いつた時よりも「一度目

一度いつた時よりも三度目とオーガズムは高まってゆくのです
どいまでもどいまでも女性の体は感じやすくなつてゆくのです。

オナニーは女性の性感を育てるためには必要不可欠なのです
女性がオナニーをするときは自然に心も体も気持ちよくなつります
るでしょう。

ですから繰り返す」とに体は感じやすくなり、いく回数が増えても
くたびにオーガズムは深まってゆくのです。

初めて男性と性を交わした場合でも、オナニーの経験が在るかなし
かでは感じ方に差があることは言つまでもありません。

女性のオーガズムは育てるものなのです
ですから女性のオナニーは蓄あかなのです。

反対に男性は長く持続するように身体をつくります
挿入から15分そして30分

やがては一時間ともつようになります。

男性のオナニーは長く強くもつようになれる為の業です
ですから男性のオナニーは太刀磨きなのです。

男女がひとつとなり、はじめ女性は7回オーガズムへ達するようになります
自らの身体を導きます

男性は女性が7回オーガズムへ達するまで運ぶのです。

そしてやがては女性が49回オーガズムへ達するようになります
その後は回数を繰り返した分、女性のオーガズムの感度は敏感さを
増してゆき、身も心もとろけるようになつてゆくことでしょう。

体位は女性上位（騎乗位）が良いようです

なぜなら女性が一番美しく見えてお互いが深く交われる体位だから

です

そして男性の疲労も少なくお互いの動きを合わせやすいのです。

ピストンの運動はさほど必要ではありません。

深く挿入して、ゆりかごのように揺らす運動がよいでしょう。

このようにして女性が、深いオーガズムに導かれてゆきますと女性は大地に根をおろし天に向かって咲き誇る花のよう

あらゆる全てに感謝したくなるような心地にならることでしょう

そして男性は乱れ咲く花の舞を自らの上に見染めて

すべてをゆだね任せたその姿に大いなる自信と勇気が湧いてくることであります。

私はこの体位を天花の舞テンカノマツと呼んでおります

男性と女性が体を一つに合わせること

本来それは心も一つに合わせるというものののですが現実はバラバラなのではないでしょうか

男性は女性を味わい愉しみ

女性は男性から受けた快感を味わい愉しむ

これではお互い自身の自己満足なのです。

そのままに続けてゆき一定の時間と回数を重ねると心も体も離れるばかりとなるのです、やがて行為はマンネリとなり女性の感度は悪くなり、男性の性力も下がる一方なのです。

世にセックスレスという言葉がありますがこの原因はお互いの自己満足のSEXにあるのです。

本来、人は人に仕え尽くしてはじめて人として存在するものですそれは自己満足ではなく自己以外の相手満足に他なりませんですから女性は男性の上で49回オーガズムに達して、その乱れ咲く花の舞を男性にお見せすることが自己満足ではなく男性への最高の仕えとなるのです。

中国の素女経に次のようなくだりがござります

男性は一度射精を抑制すると氣力が増し一度目は目と耳が明るくなる

三度目は万病が消えて腸が安定する

五度目は血脈が増し六度目は腰が強くなり

七度目は尻と太ももの力が倍になり八度目は生氣があふれて輝き

九度目で寿命が延び

十度目で悟り神明に通じる（素女経より）

男性は女性が無限にオーガズムを感じるように運ぶことが女性に恩くすことになります。

男性はやがて生氣に満ちて健やかになり神明に通じることになるものを素女経が語るものです。

女性が無限にオーガズムに達して感じてゆくと、女性は美しく若くなりその肌はみずみずしく胸も豊かになることであります。

女性が胸を豊かにしたいと思われるならば、寝るときと目覚めたときの一日2回は薔開きでオーガズムに達するように自らを運ぶことです。

そのときに乳房への愛撫もお忘れなきよ。

その2 ウテルスが開くとき

男性ならば女性を一度でもいかせることが大変に困難なことであることをご存知でしょう

またほとんどの女性が真のオーガズムを経験していないのも現実であります。

いにしえから男性は女性をオーガズムに導くためにありとあらゆる努力をしてこられました
女性をオーガズムへと運ぶには心と体の両面から導くことが大切です。

単に、女性を辱めて、性感を刺激していかせてしまう行為は
厳重に守られた砦に武力で押し入るようなものなのです
たまさか砦に押し入り占領できたということもあるでしょう
ですが現実にはそれは破壊行為なのです

そのままに回数を重ねれば女性の心と体は破綻をきたし
やがて不感症となり男性を受け入れられなくなつてゆきます
砦は自らの意思によつて開かれて融合調和して、ひとつにならなければならぬのです。

もとより女性の体は男性に触れられると感じるようになります
男性は女性を感じさせるために乳首に触れたり花びらに指を入れて
動かしたり性交したりなさるでしょう

当然女性は気持ち良くなつて声を出したり身悶えたりします
すると男性はもっと女性を感じさせてエクスタシーな状態にするため
にその行為は強く激しくなつてゆくことでしょう

そして女性はその快感に耐えてゆくのです
いきそくなつてもいかないよう自然に快感を耐える方へと心と
体が動きます

それは女性が快感を味わつているという状態でもあります
しかし男性はそれでも女性をいからすためにさらに強く激しい行為となり

やがて女性は屈服したように男性の行為による快感の渦に負けてオ
ーガズムに達するのです。

これはあきらかに破壊行為なのです、これを普通の流れだと思われる
でしようが大きな違いであるのです
この中で最大の問題点は女性が快感に耐えるという点なのです
オナニーのときは心地よくなるように運ぶのに、男性にされている
時はいかないように我慢しているということです。

人の肉体と心といふものは適応性があるということをご存知でしょ
うか

毎日走る練習をすればやがて走る速度が上がり耐久力も増してゆきます

毎日忍耐の練習をすればやはては忍耐強い心となつてしまります。このように人の体と心は受ける刺激と繰り返しの回数の分その状態へと適応してゆくのです

これあてはめて考えてみますと女性が性的刺激を受けて息絶え絶えとなつても、オーガズムに達しないように耐える（味わつている）ということは、次第に心体は刺激に慣れてしまひソフトな刺激には満足できなくなつてゆきます。

いかないよう耐えた分オーガズムにいきずらくなつてゆくのです。結果、せつかく感じやすい体であつたものが不感症へと進むことになるのです。

ゆえにこれを破壊行為といつのです

本来女性の心と体は「デリケートなもので

感じる心と体が整えばほんのわずかな刺激でもとても感じてゆくようになるものです。

また、女性がオーガズムを感じている前に男性がいきはてているとするならば

それは性欲のはけ口に男性が女性を利用していることになります。女性が一度オーガズムにいきつくと終わつてしまつてなるべく長く快感に身を委ねていようとするならば、それは皿の快感の為に男性をこき使つてじる気になるのです。

この書のよつにしてゆきますと女性は今までに経験した事のないような快感覚に上りつめてゆき、男性はいまだ見たこともないような女性の悶え狂う姿を見てその感触を感じてゆくことが出来るのです。

そしてある段階を超えてまいりますと更に快感覚の度合いが変わってゆくのです

それはウテルスが開いてゆくからです

女性のウテルスが降りて男性のシンと重なりひとつになるのです。

男性のシンはウテルスに包まれてえもいわれぬ感触を憶え、女性はウテルスに包まれたシンを全身に感じて、かつて経験した事のない感覚に身を悶えさすことになるのです。

ウテルスはドイツ語で子宮のことです

私はウテルスのことをアステイと呼んでいます。

アステイに男性のシンが入るということは普通にはありません
男性のシンが大きく長いからアステイに入るというものでもあります
なぜならアステイは固く閉ざされていて簡単には男性のシンを受け入れてはくれないからなのです。

ではどのようにしたら良いのでしょうか

それはテクニックではなく継続なのです
継続は力なりと言います

女性は7回オーガズムを迎えるように自らを導き、男性は女性が7回オーガズムを感じられるように運ぶのです。
そしてやがては49回オーガズムを迎えるようにしてゆきます
そうして繰り返してゆきますとやがて固く閉ざされていたアステイが開き、自ずとシンを包み込むように下りてくるのです。
それまで根気よく続けることが大切なのです。

* 女性の花びらにベビーオイルのようなものを十分に塗り撫でさするといいでしょ、
そして誇張した男性のシンにもベビーオイルを塗ります

そうするとスマーズに挿入ができます
体位は天花の舞です

女性は男性の膝に手をあてて仰け反るような体位をとります

女性が仰け反るとアステイにシンが入りやすくなるのです
後は $7 * 7 = 49$ 回、オーガズムに達するようにお互いが努力する
のです

アステイにシンが包まれるようになりますとシンの先はなにかに咥えられたような感触を憶えます。

そうなれば、男性は女性を抱き寄せるようにして胸がふれあうようにしてよいでしょう、

基本はたつたこれだけです、たつたこれだけなのですが古今東西女性が自らオーガズムに達するように運ぶということをいまだしていなかつたのです。

男性は言葉で女性を導くことも大切です、女性の耳朶にキスをしながら囁く男性の言葉は女性への暗示となり体もそのままに反応してゆくものです。

しかしそれは、あくまで女性を導くための愛撫であるのです。
愛撫ではなく愛無にならないように注意が必要です。

その3 進化へのススメ

わたしたちは愛といつも言葉をよく使っております

太古の言葉ではアは神様イは人のことを言うものです
アイとは神様と人がひとつになつた状態をいつのです

感情想念の好きという感覚が愛なのではありません

愛する方と真にひとつ（アイ）になれたか否かを決めるのは自分で
はありません、

人出来るることはそこに向かう努力を積み重ねてゆくことなのです。
そもそも愛してるという心の感触は錯覚にしかすぎません
なぜなら人は皆お互いを愛し結ばれるのでしょうかけれども、年月の
たつ間にその気持ちは変化してしまうものだからです。

真のアイは進化してゆくものなのです。

人の心は動かそうと思つて容易に動かせるものではありません
空腹のときに満たされているといふら思つてみても満たされないよ
うに

愛したいから愛せるといつものではありません。

嫌いな人にも尽くせなければどんなに好きな人へも尽くすことはで
きないものなのです。

アイにいたるには限りない努力が必要だということなのです。
女性が無限に男性の上でオーガズムを感じてゆき、男性が女性を無
限にオーガズムに運んでゆきますと、お互いを慈しみ尊ぶ心が自ず
と生れてくることでしょう。

相手によるのではなく自分自身がいかにあるかによるのです、です
から始めは心と体を作る練習だと思つてしてみるとことでしょう。
パートナーとの契りが週に一度なら他の日は薔薇^ア、太刀磨きで
練習をするのです

繰り返しの回数、長い時間を努力した方が結果が違うのは言つまでも
ありません。

一朝一日にはアステイは開かないのです。
パートナーへの思いが真のアイに生れかわることもじく自然な運び
でなければならないものです。

アステイがひらいたなら女性は男性とひとつになつてわずか数秒で
オーガズムに達するようにもなつてまいります

そうして一度じき一度三度とオーガズムを迎える」とにその強さ深
さは増してゆきます。

女性の全身は赤く染まり大粒の汗のしづくが滴り落ち、意識も遠の
くほどに感じてゆきます、それでも恐れずにさらにオーガズムに達
して超えてゆくのです。

女性はもうこの男性なくして生きることもできないような心地に誘
われてゆくことでしょう。

男性はその女性が心底愛おしくなり、その女性の願いが自らの願い

となつてゆくことあります。

男性は女性がオーガズムに達したならその都度に褒めてあげることも大切なことです

女性はあまりに深いオーガズムを感じてゆくとやがて怖くなるもので、

その時に男性の褒める言葉が支えになることでしょう。

女性はオーガズムに達することを恐れていません

果てしなく果てしなく超えてゆくのです

やがて女性は自分の体なのか心なのか何なのかわからなくなつてゆきます

まったく別の世界に存在しているような感覚を憶えてゆくのです

それは宇宙への回帰

イノチのフルマイ

アステイへの回帰現象なのです

ヒトはやがてすべてのみなもとである大宇宙のど真ん中のアステイにひとつになるのです

そこからすべてが変わってゆくことになるのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7016g/>

オーガズムは進化する

2010年10月22日00時44分発行